

学校教育目標	確かな学力を身に付け、心豊かにたくましく、ともに学ぶ児童の育成 ～150年分の感謝を込めて！チーム・笑顔・挨拶～		
a ミッション	○ 小中連携教育を通した主体性・協働性を育む教育の推進	a ビジョン	○ 「自ら学ぶ子」「ともに学ぶ子」を育てる学校 ○ 通ってよかった・通わせてよかったと実感できる安心・安全な学校 ○ 児童が憧れ頼れる教職員を育成する学校

評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
確かな学力の育成	主体的に学ぶ力の育成	○算数科を中心に「ほめ」と「対話」のある授業を実践する。 ・算数的な見方・考え方をほめる。 ・主体的な態度をほめる。 ・児童同士の関わりのある場を設ける。	○学期末のテストと学期末実力テストにおいて、クラスの平均点を、目標値（学期末テスト：低学年90%・高学年80%以上、学期末実力テスト：低学年85%・高学年75%以上）にする。 ○標準学力調査（12月）において、クラスの平均点を全国平均以上にする。 ○主体性に関するアンケートを、目標値以上（4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上）	<学期末テスト> 1年生：90 2年生：90 3年生：90 4年生：80 5年生：80 6年生：80 学校合計 51.0 <実力テスト> 1年生：85 2年生：85 3年生：85 4年生：75 5年生：75 6年生：75 学校合計 48.0 <標準学力調査> 1年生：82.0 2年生：70.0 3年生：71.1 4年生：68.3 5年生：60.0 6年生：71.6 学校合計 423.0 <主体性に関するアンケート> 4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上	<学期末テスト> 1年生：88 2年生：94 3年生：92.5 4年生：85.5 5年生：75.3 6年生：90 学校合計 526.3 <実力テスト> 1年生：73.7 2年生：82.3 3年生：75.5 4年生：74.4 5年生：70.5 6年生：79.6 学校合計 456 <標準学力調査> 12月実施 <主体性に関するアンケート> 4段階評価の内、3以上の評価をした児童81.9%以上	103	95	B	○学期末テストの結果はほとんどの学年で目標値に達している。一方で、実力テストの結果は目標値に近い学年が半分であった。文章の読み取りや表の見方に課題のある児童がいた。また、単位換算や図を適切に読み取ったあとに、正しく立式する力にも課題があった。既習内容を活用する力や、問題場面を的確にイメージする力をさらに付けていく必要がある。 ○主体性について、特に「算数の学習に自信がある」とした児童が増えた。年度初めに「ほめ」と「対話」のある授業の在り方について校内研修を行ったり、授業研究を実施したりすることで、職員イメージを共有し、実践していることが、児童の自信・主体性の向上につながっていると考えられる。	○	○	○	・算数科は見方・考え方をほめるという指導方針が素晴らしいと思った。この取組が全ての教科の見方・考え方にスポットを当てた授業づくりにつながれば「主体的な学び」を促す授業実践になると考える。 ・「ほめる」という事で児童はやる気になり、「対話」する事で自分の考え方を伝えることが出来る。達人になるために、とにかく経験値を増やさないといけない。お互いに気持ちよくなるのが大切である。 ・「ほめ」と「対話」にこだわって学校全体で取り組み、成果を上げることが分かる。 ・テストでの成果については、学年で格差がある。基礎的な知識技能にこだわって、小中合わせて取り組んで行けるとよい。	・教材研究をしっかりと行い、ほめどころに対してほめの手立てを講じることを徹底することで、児童の見方・考え方が深まるようにする。 ・対話について、教職員の意識や促し方に差があるため、対話の種類を4種類に絞って、具体的な問い・具体的な児童の姿をイメージして授業を行っていく。 ・キラキラタイムの記述の視点を明確にして、自己の気づきや成長・生活とのつながりを表す力が付くようにする。 ・トレーニングタイムの時間で音読やフラッシュの反復学習に全学年で取り組み、基礎学力が定着するようにする。
豊かな心と体の育成	対話を通したコミュニケーション能力の育成	○「久保のこだわり」を実践する。 ※「久保のこだわり」とは、ていねいな言葉遣いについて指標に表したものである。 ○児童の実態に合わせて課題意識を喚起し「久保のこだわり」の価値や意味について考えさせ指導を徹底する。 ・アンケートの実施 ・挨拶に対する自己評価とその理由の共有 ・挨拶見える化運動の掲示	○アンケートで肯定的な回答をした児童数÷全校児童数×100 ○理由の記述や行動観察から肯定的に評価できる児童の割合 ・肯定的評価の児童数÷全校児童数×100	アンケート自己評価結果：85 理由記述と行動観察：50	アンケート自己評価結果：78 理由記述と行動観察：55.5	91.7	111	B	○アンケートによる自己評価を分析すると、中学生に対する挨拶の項目が極端に低く、それ以外の友達や先生、お客様への挨拶や、言葉づかいに関する自己評価は高かった。児童会を中心に挨拶運動をしているが、その成果が上がっていると考えられる。今後の課題は、同じ敷地内で生活している中学生との関係作りである。2学期以降の取り組みで、中学校とのつながりを意識した挨拶運動を、児童会を中心に展開していく予定である。 ○今年度は、丁寧な言葉遣いや挨拶の価値や意味にも気づき、実践に生かしていきたいと考えた。子ども達の記述には、「挨拶をするとうれしい気持ちやすっきりした気持ちになる」とか、「自分が挨拶をしたら相手もしてくれてうれしい」といった、価値に気付く記述も見られた。想定していたより多くの児童がそこに気付けたことは成果であるが、「人とのつながりを作る」という視点で久保のこだわりをとらえる児童が少ないことが課題である。人とのつながりを深める取り組みとなるよう、児童の発案をもとにさらに充実させていく。	○	○	○	・「久保のこだわり」にとことんこだわって欲しい。よい結果が生まれると考える。 ・自己肯定感が高まる教育活動に期待している。 ・「挨拶」はお互いが気持ちよくなるのが大事なことだと考える。 ・「久保のこだわり」として丁寧な挨拶が主体的にできていることは中学生にもよい影響があると感じている。一緒にする行事や挨拶運動を更に進めて欲しい。 ・「中学生に対して」というと連帯があるのかハードルが高いのかもしれない。中学校としても「小学生へ」を意識して取り組みを進めて欲しい。	・中学校とのつながりを生み出す取組をすすめる。地域貢献活動に向けた取組をきっかけとして、同じ地域に住む小学生と中学生が顔見知りになり、自然と挨拶ができるようにしていく。また、小学校の児童会と中学校の生徒会で、オンライン会議を行い、互いの取組を共有したり相談したりする機会を設け、いっしょに挨拶運動を進めていく。 ・ふり返りを生かして、次の目標を立てさせる。
	自己の体力を伸ばす子供の育成	○新体力テストの結果から自らの課題を見だし、課題克服に向けたトレーニングを行う。 ・新体力テストの結果から、本校の課題である「長座体前屈」「握力」「50m走」に気づく。その中から自分の課題が何かに気づく。 ・体育の授業開始時に、各自の課題克服のためのトレーニングを行う。 ※12月、課題種目に関する新体力テストを行い、成果を見取る。 ○運動好きの児童を増やすための授業を実践する。 ・体育授業において、主運動の時間を30分以上確保する。 ・運動に関するアンケートを実施する。	○第2回目の測定において、課題種目に関して、第1回目測定の数値から以下のパーセンテージ記録が伸びた児童の割合。 ・「長座体前屈」… 7% ・「握力」… 15% ・「50m走」… 5% ○アンケート「体を動かすことは好きだ。」	課題克服 80 アンケート 85	課題克服 2学期より実施 アンケート 86.3	101.5	-	B	○アンケートの結果から、「運動をすることは得意」「体を動かすことは好き」である児童が増えていることがわかった。主運動の時間を十分に確保することで、体育科授業における児童の「わかった」「できた」に繋がったと考えられる。 ○「体を動かすことは気持ちいい」という項目では、若干ではあるが、数値が下がっている。 ※アンケート4月と7月を比較 ○課題克服については、新体力テストを基に、夏季休業中にIPU環太平洋大学と連携を取り、2学期から取り組めるようになる。	○	○	○	・体育の授業での取組が休憩時間の遊びに繋がっている。遊びの中で自然とトレーニングする流れは出来ていると思われる。 ・「好き」こそもの上手なものである。体を動かすことが好きという児童の割合が高いことが素晴らしい。	○課題克服に向けたトレーニングの実施 ・「長座体前屈」「握力」「50m走」を9月の体育で周知し、10月から児童個々で課題を設定し、トレーニングを行う。 ・体育安全委員会を中心に、大休日に各種目の測定を行う。（意欲の喚起及び継続） ・児童の記録用紙「パワーアップシート」に個人の伸びを記録させ、成果を実感できるようにさせる。（意欲の喚起及び継続）

久保中学校とともに

ともに学ぶ学校	愛抄を通した達成感・自己肯定感の育成	・児童・生徒・教職員による「朝の（スマイルアクション）グリーンティン（SAG）」の実施 ・児童会と生徒会を中心とした小中学校の交流機会の設定。	中学生に（アクションをつけて笑顔で）愛抄ができたことと実感できた児童	45	32.5	72	C	○	○	○	・同じ敷地内にある中学校との連携を深めるなど、立地を活かした教育活動が展開されており、6年間+3年間の育成方針が大切であると感じた。 ・「チーム久保」として久しぶりに活動開始となる。空白時間が長かったので戸惑いのある中、お互いに協力していくことが大切である。 ・意図的な交流としてひまわりを一緒に植える活動がある。こうした活動を日頃から普通に出るようになったらよい。	・2学期以降も中学校と交流できる機会を設定していく。特に挨拶運動や避難訓練、地域貢献活動などの一時的な活動だけでなく、日常の活動（例えば校内清掃など）においても交流できるように保健主事や生徒指導主事と連携して場を設定していく。
---------	--------------------	--	------------------------------------	----	------	----	---	---	---	---	---	---

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
B：80≦（ほぼ達成）<100
C：60≦（もう少し）<80
D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。